

満川亀太郎

## 奪われたるアジア

歴史的地域研究と思想的批評

書肆心水

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

奪われたるアジア  
目次

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

自序 ..... 一八

第一編 亜細亞解放運動

（アジア）  
亜細亞解放の真意義 ..... 二六

（アジア）  
亜細亞の解放（二六） 旧套を葬り去れ（二七） 此思想恐らくは国家に累せん（二八）

日支興廢の機と我積極政策 ..... 三三

支那問題の新意義（三三） 革命の徹底（三四） 共和か復辟か（三五）

支那革命と其国民性（三七） 支那の再建と青年日本の使命（三九）

国防線の推移と日支興廢の大機（四一）

回顧の時代 ..... 四三

五十年の昔に還りて（四三） 回顧と愚痴とは別問題（四四） 青年日本の将来奈何（四五）

（アジア）  
印度民族の復興的精神（四七） 亜細亞文明の復古的理想（四八）

我國民の馴化性と亜細亞開發の使命 ..... 四九

（アジア）  
亜細亞那辺に在りや（四九） 白人那辺に在りや（五〇） 世界人類の馴化性（五一）

（アジア）  
中央亜細亞及び西方亜細亞の開發（五三）

SAMPLE Shosui-Shinsui.com

青年日本の絶叫……

五五

新らしき世界戦（五五） 世界は社会主義化せるか（五六） 亜細亞に殺到する資本主義（五七）  
日支共存の根本義（五九） 露西亞を如何する（六〇） 今や日本自身の問題（六一）

第二編 大英世界政策

大英世界政策の発展……

六八

古今未曾有の大帝国（六八） 北緯四十度以南の籠蓋（六九） 露独英世界政策の比較（七〇）

亜細亞に於ける英独争覇戦……

七三

英独両国の東方政策（七三） 波斯湾に於ける英独（七五） 波斯及阿富汗の形勢（七九）  
印度問題の高調（八二） 支那より放たれたる独逸（八五） 成功せる三C政策と未成の亜細亞中央鉄道（八七）

亜細亞南半の大勢……

八九

土耳其は支那よりも早かりき（八九） 新しき、より大なる三C政策（九三）  
阿弗利加縦断の望成れり（九三） 印度外境の攻勢防禦（九四） 東南洋の英国的勢力（九五）  
緬滇国境と戦略鉄道（九七）

三C政策の拡大と中亜の動搖……

一〇〇

SAMPLE ShoshaShinsui.com

太平洋問題の新意義

十年後の中亜 (一〇〇) 亜拉比亜及び埃及 (一〇二) メソポタミア及び波斯湾 (一〇四)  
 落日の波斯 (一〇六) 絶息の阿富汗 (一〇八) 過激派と中亜 (一〇九) ..... 一一一

国際的舞台としての太平洋 (一一二) 太平洋問題全幅の新意義 (一一三) 日本及濠洲 (一一三)  
 英米和戦の關係と日本 (一一五) ..... 一一一

第三編 南方亞細亞 (アジヤ)

南方亞細亞の一角 (アジヤ) ..... 一一九

盤谷を中心として (一二九) 悉く先人飛躍の地 (一三〇) 包含せらるる諸問題 (一三二)  
 其鉄道關係如何 (一二四) ..... 一一九

残存せる独立国暹羅 (シヤム) ..... 一二七

日本鼻負の国 (一二七) 自由の国・白象王国 (一二八) 境界、面積、人口 (一二九)  
 地勢 (一三〇) 氣候 (一三一) 暹羅歴史 (一三三) 人種、宗教 (一三六) 行政教育軍備 (一三七)  
 鉄道、海運、交通 (一三五) 都会 (一四一) 暹羅を代表する米 (一四三) 主要米作地と産額 (一四四)  
 米の栽培法と收穫 (一四七) 其の他の産業 (一五〇) 商業及び貿易 (一五二)  
 邦人は何を為す可き乎 (一五四) 風俗、習慣 (一五六) 暹羅の運命 (一五八) ..... 一二七

SAMPLE Shoshi-Shinsu.com

## 第四編 印度問題

印度の不穩と其将来 ..... 一六三

印度は果して不穩か (一六三) 印度の新紀元たる歐洲大戰 (一六五)  
印度国民主義の起因及理想 (一六七) 自治運動と革命運動 (一六九)  
印度の革命党煽動と英国の対策 (一七〇) 大亜細亞主義と印度の将来 (一七三)

印度問題の帰就 ..... 一七五

日印間二個の連鎖 (一七五) 印度問題とは何ぞ (一七七) 頻々たる印度不穩の報道 (一八〇)  
曙ならんとする印度と現大戰 (一八二) 国民運動と其復古的理想 (一八三)  
独立は革命よりも難し (一八四) 印度問題の帰就 (一八六)

印度の西北境上 ..... 一八九

英国百年の憂患 (一八九) 史上の印度征服戦 (一九〇) 那破崙の印度侵入計画 (一九三)  
露西亜の印度征服計画 (一九五) 阿富汗の戰略的地位 (一九七) セイスタン問題 (二〇〇)  
攻防両軍の戰略鉄道 (二〇三)

西藏及印度の東北境上 ..... 二〇六

英国の支那侵入路 (二〇六) 西藏境上の險要 (二〇七) 東北境の諸国及諸族 (二〇八)  
雲南境上の戰略鉄道 (二一一) 英国の新要求 (二二三) 日支共存の天時 (二三五)

SAMPLE Shushinsu.com

## 第五編 近東及中東

国際政局の新中心たる中亜……………二三八

テヘランを中心として（三三八） 古代史の中亜（三三九） 文明と人類（三三二）

日本と中亜（三三三） 外人の中亜探険（三四〇） 独逸と東方古学（三三五）

波斯湾問題……………二三七

波斯湾と其史的回顾（三三七） フンデル・アバズ（三五五） パーレン島（三三〇）

オーマン王国（三三一） 休戦酋長（三三四） エル・カタル（三三六） ワハビ教国（三三七）

コウエート問題（三三七） 波斯湾の戰略的価値（三三九）

波斯に於ける英露接衝史……………二四二

波斯と英国（三四二） 波斯と露国（三四七）

英国のバグダード鉄道史……………二五三

鉄道建設の一大誘因（三五三） チェスネー將軍の研究（三四四） 土耳其とバ鉄道（二五〇）

英土両国の接衝（二五六）

波斯湾の復古的形勢……………二五九

陛下はメソポタミヤを知り給うや（二五九） 波斯湾世界的銀座通りたらんとす（二六一）

バグダード鉄道の文化的使命（二六一） 日本と波斯湾（二六三）

SAMPLE Shoshi-Shinsu.com

亜細亜の西門……………二六五

土耳其未だ亡びざる歟 (トルコ) (二六五) ハルマゲドンとは (二六七)

暴露せられたる土耳其分割案 (トルコ) (二六六) パーカー氏の亜細亜土耳其論 (二六九)

埃及か印度か (二七〇)

英領たらんとする阿刺比亞……………二七二

土耳其の運命 (トルコ) (二七二) 三洲の形勝たる阿刺比亞 (アラビア) (二七三) 英国の対阿刺比亞政策 (二七四)

阿刺比亞は将来の大富源 (アラビア) (二七五)

東方問題の難関……………二七六

土耳其分割の難関 (トルコ) (二七六) 亜細亜土耳其と列国 (アラビアトルコ) (二七七) 過激派と回教徒 (二八〇)

シリア問題 (二八一)

猶太民族運動の成功……………二八三

国家無きの悲哀 (ユダヤ) (二八三) 三千年前の猶太国 (ユダヤ) (二八四) 世界に於ける猶太人 (ユダヤ) (二八五)

改宗及び雑婚 (ユダヤ) (二八六) シオニズム運動 (ユダヤ) (二八八) パレスチナに於ける経済的發展 (ユダヤ) (二九〇)

英国と猶太国 (ユダヤ) (二九二) 出埃及と猶太建国 (ユダヤ) (二九三)

SAMPLE Shosetsu-Shinsui.com

## 第六編 日米問題

太平洋に於ける米国……………二九六

太平洋に乗出せる米国（二九六） 彼理来航と海権問題（二九七） 布哇の合併（二九八）

米西戦争（二九九） 巴奈馬運河（三〇〇）

日米戦争の利害……………三〇一

日米不和の原因（三〇二） 日米戦う可きか（三〇四） 戦争の利害得失（三〇五）

## 第七編 阿弗利加

（アフリカ）  
阿弗利加縦貫鉄道……………三〇一

阿洲地図の塗直し（三〇二） カイロよりカルツーム（三〇三）

カルツームよりゴンドコロ（三〇三） ゴンドコロより白領公果（三〇六）

独領東阿の滅亡（三〇八） カタンガ（白領公果）より岬（三〇〇） サハラ鉄道（三〇三）

サハラ鉄道の沿革（三〇三） 雄大なる仏国の計画（三〇四）

（エジプト）  
埃及国民運動……………三〇六

大英帝国の憂患（三〇六） 保護国となるまで（三〇七）

SAMPLE-Shinsu.com



奪われたるアジア

歴史的  
地域研究  
と思想的  
批評

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 凡例

一、本書は、滿川龜太郎著『奪はれたる亞細亞』（大正十年三月五日発行、廣文堂書店）を底本とし、新たに版を起こしてその全文を取めたものである。

一、本書の副書名「歴史的地域研究と思想的批評」は本書発行所が補ったものである。

一、底本は旧漢字・旧仮名遣いであるが、これは新漢字標準字体・新仮名遣いに置き換えた。送り仮名は、不統一のものを含め一切底本のままとしてある。

一、本書では拗音促音小文字表記を使用し、外国地名と人名などの片仮名語においても現今一般的と思われる拗音促音小文字表記を使用した。が、底本では仮名文字の拗音促音小文字表記はされてない。

一、（ ） 括りのルビ書き（振り仮名、および（ ） 括りの行内二行割注は本書発行所が便宜的に補ったものである。原文中わずかに見られた（ ） 括りの行内二行割注は、後者との区別のため、単に（ ） 括りの一行組み表記とした。

一、踊り字（繰り返し記号）は、現在でも一般的に使われる「々」以外は不使用とした。

一、ごく明らかな誤植は訂正した。また、表の組体裁をいくぶん変更したところがある。

一、句読点は原則として底本のままである。ただし、底本では行末であるためか、あってよい句読点が不在であるケースがまま見られたので、これは適宜補った。また、片仮名人名と地名において「・」を補ったところが若干ある。

一、外国地名と人名などの片仮名表記不統一および疑問のある表記も原則そのままとし、「ママ」の注記も省いてあるが、至近箇所における不統一については、当の範囲内の多数派ないし現今一般的なものに表記統一したところがある（漢字当て字の外国地名表記の不統一も至近箇所における場合のみ当の範囲内の多数派に表記統一した）。

一、「『』」の使用法は底本のままとした。

一、目次直後に挿入した地図は底本収録のものではないが、参考のため収録した。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

満川龜太郎著

奪はれたる亞細亞

大正十年刊

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

『奪われたる亞細亞』<sup>(アジア)</sup> 自序

—

満川 亀太郎

私は今でも明治二十八年五月十日を忘れたことが無い。此の日は実に明治大皇帝が遼東半島還附の詔勅を下し賜った日である。

……然るに露西亞<sup>(ロシア)</sup>独逸<sup>(ドイツ)</sup>兩帝国及法朗西<sup>(フランス)</sup>共和国の政府は日本帝国が遼東半島の壤地を永久の所領とするを以て東洋永遠の平和に利あらずと為し交々朕が政府に懲憚するに其地域の保有を永久にする莫からむ事を以てしたり……朕<sup>(手紙)</sup>乃ち友邦の忠言を容れ朕が政府に命じて三国政府に照覆するに其意を以てせしめたり

私は小学校時代に此の一節を深く記憶に存して奉読した。何れの日か国威を揚げ、国力を張らんかとは小さき我が胸を絶えず鼓動せしむる所のものであった。其後故陸奥伯の『蹇々録』を読み、当時の事情を一層知悉するに及びて、益々国弱小なれば辱めらるる所以を教示せられたのである。三国干渉は実



亜を恐怖せしめたる強敵北欧の熊を織手以て斃したる我日本の武勲は、歴史に見る日本武尊が熊襲を仆し給える其儘(まま)の物語である。同じき亜細亜(アジヤ)の民族が露西亞(ロシア)を敗りし喜びは、ヒマラヤ山の麓にもナイル河の畔にも東郷を讚美し、乃木に憬憧する無数の青年亜細亜(アジヤ)を生んだ。漢訳英訳の日本研究書は包装せられたる弾薬として、青年から青年へと撒布せられた。革命支那の青年が興国的魂として受入れたのは我が明治維新の精神である。然かも我國民自身は斯くの如き日露戦争の有する偉大なる世界文明史的意義を悟らず、支那革命や印度独立運動(インド)と何の交渉も無いと思える者が沢山ある。劇中の人は観劇者より教えられるを常とすとせば、是亦蓋し己むを得ぬことである。一九一九年『亜細亜の新地図』著者ヘルベルト・アダマス・ギッポンは同書の結論に於て左の如く述べている。

現代亜細亜史に於て最も重要な出来事は日露戦争及び日本の欧洲戦争参加である。此両者は(アジヤ)亜細亜が欧洲支配に対する挑戦に外ならぬ。日本の第一の目的は東方亜細亜に於ける露独の勢力を駆逐するに在った。最後の目的は亜細亜に君臨する全欧洲の勢力の駆逐に存する。之を知らずして近視眼なる欧洲の帝国主義者は、独露勢力の破壊に喜悦し、日本が亜細亜に於ける彼等の領土に貢獻するならんとして歓迎したのである。露西亞侵入の恐怖は英国を悩まし、独逸の計画は英仏を脅威した。それが如何に愚劣なる迷謬なりしよ。

亜細亜人の眼より見れば、満洲の野に於ける日露戦争の勝利は、欧洲人に対する亜細亜人の凱歌に外ならなかった。彼等は之より大なる亜細亜解放戦の陣頭に立ったのである。欧洲人の勢力も軍備も最早久しく栄華を誇る能わず、亜細亜に課せられし欧洲支配の強制は、亜細亜の一族たる日本に依て見事より、優越なることを証明せられた。日露戦争の影響は全亜細亜に及び長く胚胎せられし

## 自序

亜細亞(アジヤ)国民運動は、カイロ、コンスタンチノールよりバタビア、北京に至るまで一斉に動き出すに至った。歐洲列強は、亜細亞主義の共通なる絶叫と理想とを有せる青年埃及(エジプト)、青年波斯(ペルシヤ)、青年印度(インド)、青年暹羅(シヤム)、青年支那の運動に逢着しつつあったが、かかる動揺の中に歐洲大戦の機會が到来した。日本は躊躇なく之に参加し、独逸(ドイツ)の勢力を支那より追放したのである。

ギッポンは之より亜細亞人(アジヤ)の覚醒、亜細亞(アジヤ)の興隆に言及しているが、最早多くを引例する必要もない。如何に青年亜細亞(アジヤ)の志士が東方の光を仰ぎ、又現に仰ぎつつあるかを知ればそれで十分である。

## 三

五ヶ年に亘れる歐洲大戦は有史未曾有の一大變動であつた。それが全世界の政治、社会、思想、生活の多方面に根本的变革を与えたる影響は殆ど言語に絶するものがある。而して之を我亜細亞(アジヤ)の問題より見れば、又実にギッポンの説けるを須(ま)たず、局面回轉の大動機たらざるを得ぬのである。先ず之を歐洲勢力より言えば、二百年亜細亞(アジヤ)の脅威たりしロマノフ露西亞(ロシア)が一朝革命の爲めに忽焉跡を没し、今やレニンの新しき勞農露西亞(ロシア)に依りてソビエツト政府が組織せられ、世界改造の第一頁を荒蕪たる極北白雪の天地に開展し来りしが如きは異変中の最大なるものとせねばならぬ。然かも彼三日にして仆るべしと言せられしもの、三十日を経過し、三ヶ月を経過し、三年を経過せる今日に於て基礎漸く鞏(かた)く、南露西伯利亞に簇生したる反過激派の勢力を一掃して、此等を後援せし聯合諸国をして終に匙を投げ出さしめ、公然の承認には未だ到らざるも通商開始の声を聞くまでに漕付けしは、異常なる成功と言わざるを得ない。レニンの豪語せる全世界の赤化が果して実現すべきや否やは疑問とするも、彼がカイゼルの遺

鉢を継いで全回教徒を籠蓋し、土耳其、波斯、阿富汗斯坦、高加索等の青年運動を後援しつつあるが如きは、吾人青年日本を顧みて限りなき痛恨を感じる。夫れ等は皆当然我日本の為さねばならぬ仕事である。それを悪魔とか野獸とか詬罵讒侮を極めしレニンに任かせて国辱を感じなければ、日本々来の大精神は地を払って絶ち、腐敗墮落の淵に陥つたものと断定せざるを得ないのである。

伯林バグダード政策の独逸も亦革命の爲めに其大目的を根本より一掃した。而して独逸に従属せし古き土耳其は、今日コンスタンチノープルに於て纔に英仏の鼻息を窺うに過ぎないが、山河荒廢の裡より生れし新しき青年土耳其は勃然としてアナトリアに起り、革命の驍将エムベル・パシヤに依りて勞農露西亞と策応し、以て歐洲資本主義の驅逐を図りつある。波斯も亦最近英国外相カーゾン卿によりて波斯撤退を声明せられた。英国勢力の撤退はそれだけ波斯国民運動の成功を意味する。印度は如何、戦争中印度の忠誠に担保とせられし自治は如何にしても与えねばならぬ。印度の自治は独立にまで相当の距離を有する。さればとて自治を与えざれば与えざるだけ、独立への距離を接近せしめる。印度独立運動は今や米國紐育を根拠地として全世界に宣伝せられる。埃及も亦形式的には多年望みたりし独立を得た。然かも今の所外交の権も有たねば軍備も無い。蘇士運河は依然英国の勢力下に在る。これでは独立の空名を得ても何の役に立たぬ。青年埃及は黒人阿弗利加と共鳴して全阿弗利加解放の氣運を醸成し来らんとする。全亞細亞同族が此の動搖である。

支那の治乱興廢は直接日本の存亡に影響する。支那が戦争に依りて列強の共同監政下より免れたことは一大天佑であった。支那は此の間に革命的精神を透徹し、以て東亞の強國に改造すべきであった。それが出来なかつたことは我が日本の対支政策を過ちしことも、一の大なる原因である。されど過去は詮

自序

なしとして支那も今や絶対的存亡の岐路に立ちつつある。革命か、亡国か。支那の亡国が直ちに我日本の衰亡を招徠すべしとせば、日本は躊躇なく青年支那の革命を援くべきである。これ東亜に漲る排日的氣勢を根本的永久的に跡を絶つべき唯一途である。加<sup>(イカのみならず)</sup>之<sup>(インド)</sup>印度も波斯も土耳其も一層日光を仰ぐに至るや疑を容れざる所である。亜細亜<sup>(アジヤ)</sup>は今や日本の行動を仰視しつつある。千載の機会に於て其一步を誤らざらんことは吾人青年の衷心の大願である。

四

少年国を憂い、聊<sup>(いささ)</sup>か亜細亜<sup>(アジヤ)</sup>の盛衰を学びてより茲<sup>(ここ)</sup>に廿余年を経過した。曾て遼東半島の上に注がれたる私の涙は、其後押し括<sup>(か)</sup>けて全亜細亜<sup>(アジヤ)</sup>の上に流るるに至った。『奪<sup>(アジヤ)</sup>われたる亜細亜』の観念は明治二十八年五月十日を回想すると同一精神の発露に外ならぬ。私は過去数年に亘りて奪<sup>(アジヤ)</sup>われたる亜細亜の跡を辿り、茲<sup>(ここ)</sup>に一の記念塔として本書を出版する。それが私に取ては万里の長城よりも、ペルセポリスの敗殿よりも、ボルポドウの仏跡よりも貴き意義と価値とを有するものなるを信ずる。私は此の次には『奪<sup>(アジヤ)</sup>還すべき亜細亜』を書かねばならぬ。されど古人も行うて余あらば文を学ぶと言った。私はそれまでに先ず祖国日本の改造を決行することが大切なるを思<sup>(おも)</sup>うて茲<sup>(ここ)</sup>に擱筆する。

大正九年十二月十九日

東京矢来台に於て

## 例言

- 一、本著は小生が数年来『大日本』、『東方時論』、『(アジア)亜細亜時論』、『(アジア)中外新論』其他の雑誌に発表したる(アジア)亜細亜問題の諸篇を蒐録し、之に未発表の研究數篇を加えて上梓したものです。全体に亘って繁閑(欠字)宜しきを(ア)ざる点もありますが、未だ多く世人の注視せずして今後の国際政局に最も研究を要すべき南方(ア)亜細亜、西方(ア)亜細亜に就ては特に力を注いだ積りです。
- 二、本書は小生に取ては、前著『列強の領土的並經濟的發展』と共に大戦を記念とする過去の(ア)亜細亜の送辭です。小生は他日適當なる時機に於て、第一世界戦の風雲を捲き起さんとする将来の(ア)亜細亜を考察して見たい考えです。
- 三、本書を二十年の往昔より我を育成し給いし家兄長崎高等商業学校教授川島元次郎氏及び最旧の先輩日本銀行総裁井上準之助氏に捧げ、併せて思想上の先師にして猶存社の同志たる北一輝氏、大川周明両氏に呈して深謝の意を表します。

SAMPLE  
Shoshi-Shinshu.com

第一編

亜<sup>(ア)</sup>細<sup>(ジ)</sup>亜<sup>(ア)</sup>解放運動

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com



## 二、旧套を葬り去れ

(アジヤ) 亞細亞問題！ 畢竟そは旧くして新しき問題である。 歐洲列強が(アフリカ) 阿弗利加の分割を了して、(アジヤ) 亞細亞を(アフリカ) 第二の阿弗利加たらしむべく着手してから、二百年の星霜が流れた。(ロシア) 露西亞、(フランス) 仏蘭西、(イギリス) 英吉利の三国が、或時は苟合し或時は葛藤しつつ、(アジヤ) 亞細亞分割に汲々とした。(アジヤ) 亞細亞の近時外交史とは露仏英三国が(アジヤ) 亞細亞に加えた分割史であり——(ドイツ) 独逸の(アジヤ) 亞細亞分割に参加したのは最近の事実で、其分割した分量は極少であった——(アジヤ) 彼等の(アジヤ) 亞細亞問題とは要するに如何に(アジヤ) 亞細亞を分割し了せんとするかに在った。故に彼等よりすれば(アジヤ) 亞細亞問題の解決とは(アジヤ) 亞細亞を完全に分割し終るということであつた。

(アジヤ) 亞細亞問題の真意義に触れずして西洋学問の直訳に浮身を窶せる(アジヤ) 一部の人々は鸚鵡返しに(アジヤ) 亞細亞問題とし言えば直ぐに侵略問題か何かの様に輕悔の眼を以て見ている。(アジヤ) 而して現実に加わる欧米資本主義の脅威が如何に我々同胞の運命を決定すべきか(アジヤ) ちよう重大なる問題を度外視して、徒に国内の人心を惑乱している。

彼等は自ら新人を以て任ずるかも知らないが、新人とは横文字を読む者なりとの定義が確實にならざる限り、吾人が軽々に彼等の言う所に従つて(アジヤ) 亞細亞問題即軍閥、(アジヤ) 亞細亞問題即侵略主義と解釈することは出来ない。

(アジヤ) 併しながら世間一部の輕佻浮薄なる徒をして(アジヤ) 斯く(アジヤ) 亞細亞問題を輕侮し来らしめし責任は、從來此の問題に与ずかりし人々の心得が(アジヤ) 大に間違つて居つた点にも在ることを否定する訳に行かない。吾人は尊敬すべき先輩の人々の中、(アジヤ) 支那分割論者あることを知る。更に進んで(アジヤ) 成吉思汗もどきの思想を有している

人の在ることを知る。吾人は此等の人々の思想が如何に憂国の至誠に燃え又如何に時流を追う輕佻者流に比して数十倍力強いことを痛感するに拘らず、終に之と伍すること能わざるは思想上根本に於て相容れざる点が存するからである。

冀(こいねがひ)くば旧套を脱して、所謂新人も旧人も解放の哲理の上に立つ(アジヤ)亜細亜問題を直観せよ。

### 三、此思想恐らくは國家に累せん

吾人は頃(けいじつ)日支那問題の策源地たる某衝に重要な地位を占むる某將軍を訪うて(アジヤ)亜細亜問題を談じ、談は必然に西蔵問題に入った。吾人は英国の亜細亜侵略は当年の露国の亜細亜侵略と髣髴たるものあり、英國の狙える海蘭鐵道(海門(ヘイメン)、蘭州(ラン州)、蘭州(蘭州))は第二の西伯利鐵道であることを論じた、其人は此の点に就ては否定もしなかつたが左りとて肯定もしなかつた。而して其の人の答えた簡単な言葉を分析玩味して見ると、吾人は到底黙過す可からざる謬想あることを認めざるを得ない。

其人の答えは斯様である——英國が西蔵を掠めて四川に出て来た所で、それを君の様に囂々と論じ立てるには及ばぬ。英國が西蔵を取れば我は滿蒙に更に地盤を固めるまでの話ではないかと。此人は衷心(かみしん)に考えているのである。吾人は此論に対して看過す可からざる謬想を認める。

此論は(一)彼も取れば我も取らんとする支那分割論者の口吻である。吾人は過去に於ける我对支政策中の滿蒙論が露西亞の南下に対する国防論に胚胎せる必然の結果なることを認める。併しながら今や東亜の脅威たりし露西亞侵略主義が絶滅せしからには、我東亜政策の精神にも自ら更新を要する秋が来たことを思う。——之は主として対露問題である。更に切実に言えば過激派を敵とする乎否やという問

題であるが、之は姑く他日の細論に保留したい。当年露西亞の南下に対する我滿韓政策が必然に緊要であつたとしたならば、今日英国の東漸政策を露西亞と同様滿蒙で防ぐという議論は、専門家ならずとも甚だ縁の遠い話で、恰も東京湾に来襲せる敵艦に対して信州の山下から発砲するが如きものである。若し英国の侵略主義に対し、彼取らば我亦取らん(また)の『必然、悪』を適用するならば、吾人は北に於て甘肅(せんせ)陝西に突出し、以て『第二の西伯利鉄道』を寸断するの戦略を講ずると共に、南に於て貴州雲南に出で西方西藏侵入軍を拘制し、併せて緬甸の高地より印度を俯瞰するの形勝を占めなければならぬ。(一)然れども以上の大事を決行せんが為めには我国は支那との完全なる了解を得なければならぬ。而して此の如き了解を得べき鞏固なる支那政府が現在組織されつつありとは、吾人の到底想像し得られぬ所である。故に日支兩國が真に打ち一丸となり、共存の大義に基く同盟を締結せんが為めに支那の革命——徹底的革命が必要である。而かも其革命は米国のデモクラシーを翻訳せるが如き口舌上の革命ではない。真に流血を辞せざる武断的統一の革命であり、東洋的共和制の革命でなければならぬ。斯くの如き革命の結果、支那が真に頻死の窮境より脱して東亜の強国に改造せらるる時、日本は初めて支那と共に手を携えて亜細亜解放運動の陣頭に立つことが出来る。故に英国の侵略主義の脅威から脱るるにしても先つものは支那の徹底的革命である、攘夷的精神の発露である。此点より論じても日本が欧米の仲間入をして苟くも支那を刻々に衰弱せしむるが如き分割的行動は蔽として之を排斥せねばならぬ。或人は支那が完全に日本と合一した時、初めて日支の国防的統一を見る事が出来るというも、吾人は亡国された支那の軍隊と共に、亜細亜解放の大業に従ふことは痴人の夢を説くよりも一層困難である。(三) 日露戦後の我対支政策は遺憾ながら支那領土保全の大眼に遠かること甚しきものがあつた。露国の侵略主義

と通謀したるが如き日露密約は明かに日支共存の精神より裏切ったものである。然かも今や我に取って侵略の苦手なる露西亞(ロシア)は幻滅した。今は須らく滿蒙(支那)より中央亞細亞(アジア)に連亘せる大政策を樹て直さねばならぬ秋である。人或は滿蒙の武装は解除す可らず、侵略主義に代るべき恐るべき過激主義の侵入を防止せざる可らずと、されど思想の侵入には劍を以て対することが出来ぬ。過激主義を融解せしむる塩は八紘を覆うて宇をなす所の我皇道である。皇道と亞細亞解放運動——此両者は異称同体である。今や露國過激派が亞細亞人の解放を宣伝しつつあるに当り、苟くも皇道を奉ずる我国が英国の侵略主義の尾を追うて、過激派にすら及ばざるが如き過謬があつてならぬ。(四)吾人は絶対に支那に対する高利貸政策を排斥する、従つて支那を高利貸的に分割せんとするが如き四国借款に対し、支那の徹底的革命を期待せる人士が反対することは当然である。

今や支那の中原に於ける風雲は急なるものあり、支那の存亡を決すべき大機は正に迫りつつあるのである。而して支那亡ぶれば、九億の亞洲同族を白人の圧虐より解放せんとする大運動も茲に大なる蹉跌を見るべきは明かである。吾人は尊敬すべき國土諸卿の考一考を冀う次第である。(大正八年十月)

## 日支興廢の機と我積極政策

### 一、支那問題の新意義

曠古無比の歐洲大戰は今や実に全世界を覆えり、従て其有する世界的意義と、其及ぼすべき世界的影響とは、絶大言う可らざるものありと雖も、之を各国に取りて考うれば地位国状其他の形勢に依りて皆相同じからず、而して我帝國に於ては此大戰を支那問題に當て箝めて考うる程、重切緊要なるものはあらざるなり。実に支那問題は今正に帝國百年の興廢を決するものにして、此問題を除いて那れに果して帝國の国是国策を決すべきものありや。或は曰く支那は永久に一個の大なる疑問なり、従て支那問題に対する答案は『不可解』の三字に尽くと、吾人は従来多くの支那通諸氏より此言を聞き、諸氏が眼前に変化する時局の端倪す可らざるに呆れつつ遂に辞を『支那は支那人をして治めしめよ』というに構えて遁るるの態度を怯なりと做す。凡そ万般の事象由来する所ありて結果を生じ、系統脈絡自ら討尋せられざることなし、支那に限りてのみ何の不可解か之れあらん。其不可解と為すは現代支那が何を要求しつつかあるかを知らざるに出づ、更に適切に之を言えは日支兩國に共通する支那の存亡を解せざるに出づ。

支那の存亡は一に懸って歐洲大戰の今日に在り。苟くも我に断乎たる積極政策あらしめば、支那問題は刃を迎えて解くるが如きのみ。

支那問題は既に単なる支那の問題に非ずして帝国の問題なり。支那を目するに他国なりとし、支那問題を目するに支那の問題なりとする時には、支那及支那問題は明かに対手關係を構成す。之を帝国よりする支那保全と、欧米諸国よりする支那保全とは意義自ら相同じからず、従て欧米諸国に於て支那問題というは所謂『対支』問題に外ならざるなり。何となれば此等諸国は如何に其外觀を装うとも、支那に對して自国の勢力扶植者たり、利権獲得者たり、窮竟支那分割者たることは已むを得ざる所なればなり。帝国は支那問題を取扱う上に於て自ら列強と異り、最早支那を他国なりと目する能わず、支那問題を支那の問題なりと解する能わず、於是乎『対支』の二字は何等の意義と權威とを有するものに非ざること信ず、蓋し支那は帝国の對手者に非ずして、對手者は支那を對手者とする列強たるべき理路に到達すればなり。

然りと雖も之を事實に徴するに、歐洲大戰の勃發までは遺憾ながら帝国の支那問題は實は『対支』問題たることを免れざりき。帝国は二十年一日の如く支那保全主義を標榜し、夫の滿洲に同胞十萬の碧血を流しし日露戦争も之が為めに戦えるものなれども、其後列強の圧力益々支那に加わり、辺境の時事日に急を告げて、廳て中原に風雲の殺到を見んとし、支那分割の危機旦夕に迫るに及び、帝国も亦自衛上已むを得ず列強に倣い、帝国々防上緊要の地域に占拠せざる可らざる準備を要せしなり。實際袁世凱が巨額なる借欺を得て支那民党を弾圧し、陽々として正式大總統の椅子に就きし時の前後程、支那に危険を促迫せし時は無かりき。表面は如何にも袁に依りて支那統一の行われつつあるかの如くなりしが、其

第二編

大英世界政策

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com





## 大英世界政策の発展

### 一、古今未曾有の大帝国

史家シーレーは其の著『英国膨脹論』に於て、自分等は殆ど知らぬ間に全世界の半を征服し且つ植民したと陳べているが、這回の大戦に於て亦独り英国をして弥が上にも其の領土を膨大せしむることに結果した。陸上の元勳たる仏蘭西(フランス)にして僅かにアルサス・ローレンの回復とカメルン及びトゴランドの獲得とシリアの委任統治権を得たるに過ぎず、我が日本に至つては猫額大の青島(チンタオ)と最爾たる南洋諸島を以てして、猶且つ世界の猜視を受けつつあるに拘らず、英国が亜細亞(アジア)及び阿弗利加(アフリカ)に於て其の領土及び勢力を拡張せしことは素晴らしいものであつて、然かも世界の論壇が殆ど声を潜めて之を黙過しつつあるは、何故であるか、吾人は其の真意を解することが出来ない。試みに一九一五年の『世界年鑑』に徴すれば、世界の総人口は十七億三千二百万人、総面積は五千七百六十四万方哩(マイル)であつて、其の内在来英領の人口は四億三千四百万人、面積は一千三百万方哩(マイル)を占め、即ち世界総人口の四分の一、総面積の五分の一強に当り、有史以来世界最大の帝国を以て目せられていた。然るに今回大戦の結果は更に阿弗利加(アフリカ)

於て東部及び西南(アフリカ)阿弗利加の旧独領を委任統治領に、カメルンの一部を自領に加え、(アジア)亜細亞に於て猶太、(ユーゼ)ヘジアスの二王国を保護国に、メソポタミアを委任統治領に加え、之に従来若くは新たる保護国及び准保護国たるオーマン、波斯(ペルシヤ)、阿富汗斯坦(アフガニスタン)、西藏(チベット)の四国を併算し、又新に濠洲に委任統治となりたる旧独領ニューギニアをも加うる時には新大英帝国の総人口四億七千万人、総面積一千九百万方哩(マイル)、之を在来英領と比較すれば正に三千六百万の人口と二百九十万方哩の領土とを増加したる勘定となる。二千歳前の羅馬帝国(ローマ)に在りても、其の最大の版図を有せしトラヤヌス帝(紀元九八—一〇七)の時代に於て、人口一億、領土二百五十万方哩を有せしに過ぎない。又以て如何に今日の大英帝国の尠大なるかを察するに足るのである。

## 二、北緯四十度以南の籠蓋

(エジプト)埃及の首府カイロを中心として、南方南阿のケープ・タウンとの間を結ぶ(アフリカ)阿弗利加縦断策と、東方(インド)印度のカルカッタとの間を結ぶ(アジア)亜細亞横断策との三角形を称して、其の各の(おの)三地の頭文字を採り三C政策となすは、既に人口に膾炙せられた所である。然るに今や同じ三Cの名称たる大英政策は、其の實質に於ても、其の範圍に於ても、一層新しく且つ拡大せられたるものとなった。即ちカイロのCは、(コンスタンチノープル)君府のCと代り、カルカッタのCは支那のCと代り、Cape—Constantinople—Chinaの大直角三角形が、(インド)印度洋を斜に底辺として、東半球大陸の上に烙印を捺した如く置かれたのである。今支那のC点を何処に置くべきかは問題であるが、英国对支政策折衝の舞台たる北京を基点として、北緯四十度に沿う線を西方に延長するならば、此線は海蘭鐵道の沿線予定地たる甘肅省(カシュガル)肅州新疆省(カシュガル)喀什噶爾を通過して直ちに露領中亞

鉄道のアンデジャンを経、<sup>(カスビ海)</sup>裏海の要港たるクラスノヴォドスク、バクーを貫いて<sup>(アジヤトルコ)</sup>亜細亞土耳其の古戦場アンゴラに至り、<sup>(コンスタンチノブル)</sup>君府を僅に南方にしてダルダネルス海峡を結ぶことが出来る。即ち新しき、より大なる三C政策とは大体に於て北緯四十度以南の<sup>(アジヤ)</sup>亜細亞大陸を籠蓋し、之に<sup>(アフリカ)</sup>阿弗利加の大部分を掩有せんと欲するものである。

### 三、露独英世界政策の比較

今西半球に於ける両米大陸の事を別として現に東半球に於ける新三C政策の範域を舞台に取り、露独英三国の世界政策を極めて簡単に比較して見よう。

過去百年間における歐洲列強の<sup>(アジヤ)</sup>亜細亞政策は<sup>(インド)</sup>印度が目標となっていた。<sup>(チボレオン)</sup>拿破翁は<sup>(インド)</sup>印度を征服せんとし<sup>(トルコ)</sup>土耳其及び<sup>(バルカン)</sup>波斯に<sup>(アジヤ)</sup>英国と暗闘を続けた。ウオタール<sup>(イ)</sup>の敗戦が<sup>(アジヤ)</sup>セント・ヘレナの悲劇に終焉を告げ、<sup>(アジヤ)</sup>英国の世界政策が<sup>(アジヤ)</sup>英國から<sup>(アジヤ)</sup>蹴落されるようになる、<sup>(アジヤ)</sup>露國の<sup>(アジヤ)</sup>亜細亞政策は<sup>(アジヤ)</sup>英國に取て正面の敵となった。

<sup>(ロシア)</sup>露西亞が海に出でんとする南下政策は<sup>(バルカン)</sup>巴爾幹か<sup>(インド)</sup>印度か極東かの三方面であつて、<sup>(イ)</sup>孰れにしても<sup>(アジヤ)</sup>亜細亞全土の掩有策に在ったことは疑うことが出来ない。勿論一九〇二年ツアールの政府は<sup>(アフリカ)</sup>勅任官リシンをして<sup>(アフリカ)</sup>アビシニア王メネリック二世の宮廷に特派せしめ、<sup>(アフリカ)</sup>阿弗利加に対する野望を表白せしことも無いではないが、<sup>(コンスタンチノブル)</sup>君府を其手に入れざる以上は<sup>(アフリカ)</sup>地中海と<sup>(アフリカ)</sup>紅海とに隔てられたる<sup>(アフリカ)</sup>阿弗利加を如何とも為す能わざるは明白である。<sup>(ロシア)</sup>露西亞は又一九〇七年英露協約に由て過去七十年來の<sup>(インド)</sup>印度侵入策を中止する所があつた。即ち剩す所は支那の中腹を貫いて太平洋に望む一途の存せしのみである。實に一九〇七年より

第三編

南方  
亜細亞  
(ア  
ジ  
ア)

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com



### 南方亜細亜鉄道図

(盤谷を中心とし新嘉坡を半径とする)

## 南方亜細亞の一角

### 一、盤谷を中心として

展げられたる地図の上に分脚器を取つて、暹羅の国都盤谷を中心とし、英国東洋経営の一大中心地点たる新嘉坡に至るまでの線を半径として、円を劃するならば、暹羅は固より仏領印度支那も馬來半島も英領緬甸も、悉く其内に収められ、加之支那の広東、広西、雲南三省の一部分、印度のニコバー及びアンダマン島、蘭領スマトラの一部分すら此圈内に入ることとなる。地は南方亜細亞の一角、海は太平洋の一部を含有して、将来国際政局必争の要点たらんとするは此の圈内である。時人の眼は西伯利、支那大陸、若くは亜細亞土耳其等に注がれて、此一角は殆ど閑却せられたるかの如き觀あれども、苟くも興亞の理想を有する者は其着眼に遺漏があつてはならない。之が研究は今日必しも焦眉の急を要せずとも、明日必ず然るの時があるのである。

## 二、悉く先人飛躍の地

暹羅(シヤム)と云えば同国に公使たりし故稲垣満次郎氏を追憶し、稲垣氏と云えば氏が明治二十二三年頃(にきん)の著書たる『東方策』を連想するが、其『東方策』の劈頭には二十世紀の世界が太平洋時代なることを痛論してあったと記憶する。然かも太平洋時代は現在の事実であつて、邦人の此一角に在留する者昨年六月末現在外務省通商局調査に拠れば、仏領印度支那(インドシナ)に五百二十七人、暹羅(シヤム)に二百五十七人、新嘉坡(シンガポール)に二千六百八十三人、蘭(ランダ)貢(シンガイン)に三百二十三(ベルゴ)人、緬甸(ベルゴ)に三百八人を算している。けれども此の数は今日帝国々力の上より觀察すれば決して多数とは云えない。又大正の日本人として誇とする訳に行かない。之を三百年前に於ける邦人の南洋発展に比較し来つたならば寧ろ慚愧に堪えざるものがあるのである。当時果して幾何の日本人が南方亜細亜(アジヤ)の一角に雄飛していたかは明かでないが、一五六九年暹羅が緬甸を攻撃した時、旧都アユチアに在留せし日本人にして之に参加せし者丈でも五百人であつたという記録を存している。又安南の広南附近なるフエホーには当時日本人の架設した来遠橋という橋が現に存して居り、バタバア(マニラ)や馬尼刺には此時代の日本人の墓碑が発見されている。其他東南洋の各地が悉く先人雄飛の跡であることは吾人をして回顧の念のみに止まらざらしむるものがある。家兄文学士川島元次郎氏の著書たる『徳川初期の海外貿易家』に邦人飛躍の遺蹤を叙述して曰く

以上によりて三百年前に於ける我邦人海外雄飛の跡を想見すべく東京(トシキン)にては父安、交趾(グイアン)にては広南、(カンボジア)呂宋にてはマニラ、(カンボジア)東甫塞にては恐らくはメコン河口(マレ)(今の仏領交趾支那大部分は当時東甫塞の版図(シヤム)なりき)、暹羅にてはアユチア、(シヤム)バタバより、遠く馬來半島のマラッカ、爪哇(ジャワ)のバタヴィア、(モルッカ)香料

諸島のアンボン島に及び、到る所自由なる日本殖民地あり、彼等の勇氣夙に南海を圧せるを以て、葡人も蘭人も英人も乃至土着の君王酋長も、皆彼等の武力に頼りて一旦緩急あるに当りては外敵の防禦をなし、国土の安寧平和を維持したる跡を見るを得べし。

と。又曰く

文祿より慶長元和の際に於て、海外渡航の免状を有する貿易船、即ち所謂朱印船（奉書船とも称す）の渡航したる地は、諸種の記録を綜合するに、東京、安南、順化、広南、交趾、占城、東埔寨、太泥、六昆、昆耶宇、信州、高砂国、西洋、呂宋、迦知安、密西耶、艾萊、摩陸、摩利伽、田彈等の各地なりき。（この一文に存する原文のルビは原  
文の仮名遣いのままで表記した。）

と。実に吾人の祖先は所謂南進論実行の急先鋒であつたのである。

### 三、包含せらるる諸問題

此の盤谷中心円（ハビユン）に包含せらるる諸問題は果して何々であろうか、極く簡単に項目丈けを列挙して後日の研究に供したいと思う。

(一) 緬滇国境問題 先年英軍が占領したる片馬は滇緬の境域たる野人山の蛮地に在る。此辺の境界は未だ明かになつて居らぬが、英国の支那印度連絡計画よりすれば、成るべく境界の曖昧なる内に百歩も二百歩も進めて置きたいであらうし、支那としては之を欲せざること明かである。

(二) 仏領印度支那問題 仏領印度支那は英仏抗争の残物であつて、人口少しも増加せず、殖民的意義を有せざる仏国が此地に占拠して門戸開放を肯ぜざるは、天理に背叛せるものでは無からうか。戦後

恐らくは一世の耳目を集中するの問題となるであろうと思う。

(三) 暹羅問題 (シヤム) 英仏勢力の間に介在して、辛じて独立を維持しつつある白象王国、同じき東亜民族としても、仏教国民としても吾人は決して他人の如き感が起らぬのであるが、此国が一步を転ずれば列強の間に呑噬せられんとする危地に在るのは頗る懸念の種である。

(四) 半島縦断鉄道 (シンガポール) 新嘉坡より起りて北に走せ、半島を縦断して一は盤谷に至り、一はカルカタに至らんとする如き、シンゴラ、ケランタン線を除いて既に其全部敷設を了ったが、此鉄道は印度洋及び太平洋に於ける英国主権の維持に、牢乎たる楔を打ち込むものである。

(五) 新嘉坡の新軍港 (シンガポール) 香港ばかりで物足らぬ、上海、新嘉坡、蘇土の海上を連絡する三S政策の中点として、英国が此地に堅固なる大軍港を設けんとする計画は、戦前早くも、一九一一年、倫敦モーニング・ポスト紙の其急務なるを絶叫した所である。東南洋の関鍵たるスンダ、マラッカの両海峡と共に、亜細亜の海権を決定せしむべき、一大天険の将来、是れ邦人の刮目して見るべき所である。

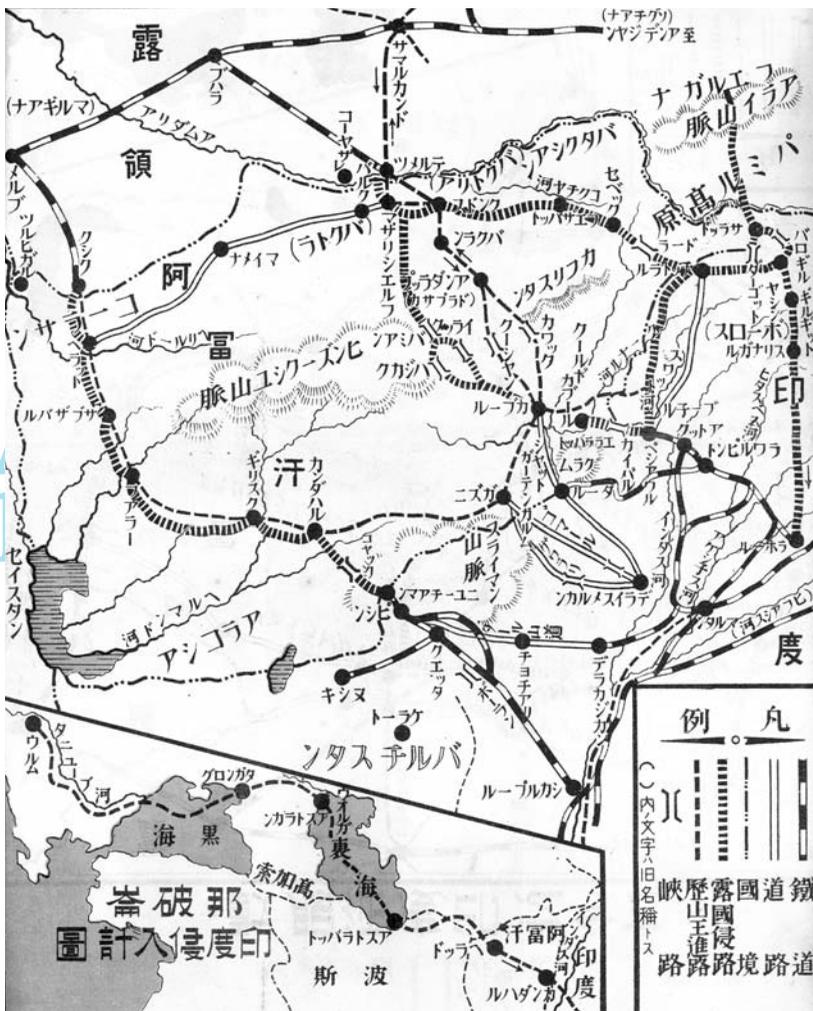
(六) 蘭領印度問題 (インド) 此の圏内に半身を現出せるスマトラ島、それは現に聯合測と独逸側との板挟みとなつて船舶を奪われたり、物資を取られたり、散々な目に会つている中立国和蘭の領土である。吾人は衷心和蘭が飽くまでも其中立を維持せんことを欲す、満腹の猿をして尚其頬に詰め込ましむるは吾人の忍ぶ所に非ず、さればとて食を拵ばざる餓虎の爪牙に供せしむるは一層の危険を感じる所である。愛する彼女和蘭よ、切に汝の節操を死守せよ。

(七) アンダマン島 (インド) ベンガル湾の海も遙かに点綴散布するアンダマン諸島、そこには夜な夜な打ち寄する波浪の音に、気も狂わし気なる幾多印度革命の志士が、囹圄の人となつて満腔の怨を消す由も無

第四編

印度<sup>(インド)</sup>問題

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com



古今の印度征服

附・那破嵩印度侵入図

## 印度の不穩と其将来

## 一、印度は果して不穩か

印度は果して不穩なるか。歐洲開戦後一年を経たる一九一四年冬期より翌一五年の秋期にかけて印度不穩の報は最も頻々として世界に伝播せり。曰く第二ラホール陰謀事件、曰くベナレス陰謀事件、曰く緬甸及新嘉坡暴動事件、此等事件に関する報道は閃電の暗を縫うて走り、迅雷を覆うの速なきが如く特に英京倫敦の心臓を鼓動せしめたり。此等の報道は世界の好事家をして、今にも印度独立の快挙にても成就するか如く思わしめ、又英国印度統治の巧拙に就て滔々論議せしめたり。之と同時に英国の心胆を寒からしめたるものは独逸の印度侵入計画並に回教徒一揆蜂起の報道なりき。實際当時の聯合軍は今日依然不振を極むるが如く巴爾幹に於ける政策戦策 両ら失敗に帰し、却て独逸をして中欧帝國建設の大理想を達成せしめつつありしかば、独逸側の陰密に計画したる印度侵入策と、誇大に流布したる回教徒蜂起説とは、印度に於ける不穩の状態を激成せしむると共に印度沿岸一帯危機に頻すとの警鐘を乱打せしめたり。されば一昨年九月パンジャブ州の英国官憲は、「若し彼等

にして官憲及人民の手により速かに抑圧せられざりせば叛乱者の企図せしが如く一八五七年の大叛乱同様、パンジャブを拏げて無政府の状態となり、啻に政府官吏のみならず、忠誠なる印度人民の虐殺は横行せしならん」と告白し、又昨年七月英国議会在於て政府がダーダネルス及メソポタミア戦の失敗を調査すべく同意せし時、「印度及阿弗利加の回教徒が開戦の当初不穩の兆候あり、一九一四年十二月より翌年九月に至るまでの間、印度の北西境に於て回教徒の暴動あり、一時重大なる形勢生ぜし」ことを暴露せり。印度が一時不穩の状態に在りしことは覆うべくもあらず、有繋沈着不動を以て誇る英国人士をして神經過敏ならしめたることは、昨春同盟国たる我国の船舶を海上に臨検し、乗客なる印度人を拉致せし一事に徴するも明白なり。

然れども其後に於ける印度の状態は如何、昨年六月印度事務大臣オースチン・チャンバレーン氏は「最近に於ける印度の不穩が独逸の使曠及少數革命党の煽動に基く人為的現象なること」を説明し、又印度總督チェルムス・フォード卿は昨年九月印度立法参議会在於ける演説に印度不穩及回教徒蜂起の風聞を打消して、「阿富汗アミール陛下との關係は最も友好親善なり、今や一部陰險者の為に誤られたる思想を一掃し、今次の戦乱が決して彼等宗教上の信仰を脅かすものにあらざることを悟れり。又波斯に於ても英国政府は露国政府と協同して独逸陰謀者を一掃し、国内の平和を回復したり。ペンゴール洲に於ては政治的土匪の横行及警察官の暗殺引続き行われ憂慮絶ゆることなきも、一時外国帰来者によりて不穩なりしパンジャブは今や頗る不穩となれり」と曰い、又近く印度刑事局長クリーブランド氏は一通信員に説明して「大戦勃発以来敵国側は印度不穩の情報を過大に吹聴したるが、第一に彼等は其過大なる情報に伴う事実の起生を希望し、次には印度に危険なる紛乱の発生を熱烈に欲求するの余り、終には欲求す

る如き事件が現に起りつつありと思惟するに至れり。多少の紛擾ありたるには相違なきも之を敵側の報道と其希望に対比すれば遙かに微細なるものにして、開戦以来の印度の实情は独逸側の打算と大相違あるが如し」と曰えり。クリーブランド氏の言は独逸の心情を洞破して殊に痛快を極むと雖も、一面亦一八五七年の如き大叛乱に到らざりしこそ斯くは樂觀を裝い得るものと見るべし。而して三月一日英國政府が印度政府より一般戦費として献金せる十億円を嘉納したりとの倫敦電報は、印度の忠誠を表明せる事実として爰に印度は全く不穩の氣を一掃し得たるが如く察せらる。然らば果して印度は最早平穩なるか。最近帰朝せしカルカッタ総領事信夫淳平氏の談新聞に掲載せられて曰く、「印度は世上に誇大視せらるる程不穩ならずと雖も、亦決して平穩なりとは断言する能わず」と。語短なりと雖も含蓄ありと謂うべし。

## 二、印度の新紀元たる歐洲大戦

一八九八年より一九〇五年まで印度総督としての任に在りたるカーゾン卿は今や統一党の領袖として、又枢密院議長として英國現内閣の一員たり、卿は今を距ること六年前即ち一九一一年二月、政治及經濟上より觀察すれば亜細亞中歐洲人の優勝権既に略々確定して動かざる見込ある土地は西比利亞、露領中央亜細亞、印度、印度支那なりと曰えり。卿の印度に在るや印度人の為に压制の権化なりとまで非議せられたりしも、卿としては英國の帝國主義を最も忠実に実行せしものなるべく、印度を目して歐洲人の優勝権既に略々確定せる土地なりと断じたるもの実に卿が自信の肺腑より出でたる言なるを疑わず。吾人は年少北村紫山の印度亡国歌を誦して其「逸居儉安喪邦家、奈此文恬武熙何、敵將凱旋庄城日、

土人斉唱太平歌、嗚呼印度事已矣、雖有万卒無一士」と言うに至り亡国の竟に起つなきを憫むの情に禁えざりしが、今や漸く印度覚醒の曙光を見、其日露戦争に依て刺戟せられたる国民的思想は、更に今次の歐洲大戦に依て澎湃勃興し、爰に劃然として印度の一新紀元を史上の一頁に印するに至れり。固より印度の全面積は露西亞本国を除ける歐羅巴の面積と略々等しく、三億一千万の人口中知識階級に属する者は僅少なる部分に過ぎずと雖も、彼等の志は最早断じて奪う可からざるなり。印度自治か印度独立か、歐洲戦争に依て激成せられたる此新しき問題は、大英帝国に取りて容易ならざる勢力消長の緊切案件たるべく、將た亦世界の齊しく注視する所なるべし。英国マドラス僧正ヘンリー・マドラス氏は昨年八月の「十九世紀誌」上に論じて曰く、「印度軍隊が馬耳塞港に上陸したる日は印度史に於て新時代の初期を劃せしものとすべく、啻に英国に關してのみならず、実に世界の文明進歩に關して印度に新地位を供したるものなり。従前印度は世界的大運動に参加したる経験無なかりき、彼等は国境を隔つるヒマラヤ山脈の爲めに世界より隔絶せられ、殆ど孤立せる生活に長夜の夢を貪りたりしが、今や其時代の終了すると共に、彼等は来るべき数世紀の世界文明に影響すべき大戦の渦中に投じたるなり」と。チェルムス・フォード卿の言明に徴すれば印度政府は尤も忠実に且つ機敏に本国政府の要求に応じて歩兵、二個師団、騎兵二個師団を仏国に、約一個師団を南阿に、同二個師団をメソポタミアに派し、其後此等派遣隊は大に増加せらるると共に、更に阿曼国なるマスカット及亞丁にも各小部隊を派したるが、此等は皆印度に於て編成せられ且つ軍需品は総て印度に於て補充せられたり。印度は果して何等求むる所なく忠誠を本国に表せんが爲めに此大軍隊を戦場に派遣し、又は巨額の軍資を献じて本国の嘉納を喜ぶのみなるか。此の如きは吾人の想像するを得ざる所にして、英国政府と雖も今日無償を以て印度の忠誠を受取らんとする

第五編

近東及中東

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 国際政局の新中心たる中亜

### 一、テヘランを中心として

爰に『中亜』と称するは、将来列強必争の中心地たる波斯の国都テヘランを中心とし、現在欧亜国際関係の禍心たるダーダネルス海峡への半径を以て一円を劃し、其圈内に入りたる諸国の物情及び列強關係に就て聊が研究の歩を進めんとするものに外ならず。

此の如き一円を劃するときは、波斯及阿富汗斯坦の二国と亜細亞土耳其とは其全部を、印度は印度河の流域たる西部地方とバルチスタンとを、亜刺比亞はバブエル・マンデブ海峡を形成する一角を除きて殆ど其全部を、露領は高加索及土耳其斯坦の大部分を、支那は新疆省の一部たる喀什噶爾地方を、埃及はナイル河流域の一部及紅海に瀕する大部分とを抱擁するに至る。斯かる欧亜阿の三大洲に跨れる地域を称するに中亜を以てするは、地理学上の觀念よりして稍々穩当を欠くの嫌なしとせず。然れども本論の主たる目的は此等諸国の上に国際政局を闡明せんと欲するに在り、而して列強の所謂東方問題は事実中亜を目標として其国是を遂行せんとするに在るが故に、中亜の形成を論ぜんとせば勢い

SAMPLES  
Shosha Chinsui.com



現代中亜概念図

(テヘランを中心とし君府を半径とする中亜の一門)

君 府、埃及(エジプト)及或は高架索地方にも及ばざる可らず。此意義に於て中亜なる呼称は寧ろ國際的たるべきものなり。或は之を帝国及支那の方面より見て西域問題又は西南亞細亞問題と称するも亦敢て妨げざるが如し。又之を歐洲より見て東方問題と称するの一層明瞭なるべきやも知る可らず。要は此圈内に入りたるの故を以て必しも之に拘泥せず、亦(また)必しも圏外の部分を窺視せず、旧の旧たる問題にして將た又新の新たる問題たる中亜問題に研鑽の歩を進めんとするものなり。

## 二、古代史の中亜

卒然として印度(インド)と云い、支那と云い、波斯(ペルシヤ)と云い、亞剌比亞(アラビア)と云い、埃及(エジプト)と云う。寧ろ世界上古の文明史中に在るの感無くんばあらず、何となれば此等の地方は古來印度(インド)、支那、波斯、埃及、アッシリア、バビロニア、パレスチナ、サラセン等の文明が興起せし所なり。人種に依りて之を別てばアールヤ、ハム、セム及ツラン人種の四種にして、此中支那はツラン人種に、印度(インド)、波斯はアールヤ人種に、埃及(エジプト)はハム人種に、バビロニア、アッシリア、パレスチナ、サラセンはセム人種に属す。而して埃及(エジプト)は此等諸国中文明の魁を成し、支那最古の記録に先つこと少くとも一千年の當時に於て既に高級なる文化の中心たり。又バビロニアは印度人(インド)が尚イラン高原に游牧を事とせし時既に文化の光輝を放てり。試みに世界に於て最も早

く發達せし天文学に見れば埃及は紀元前二七八二年、バビロニアは同二二三四年、支那は同一二〇〇年に於て之を有せり。又印度の文明が印度河畔に沿いて進み、其梵語が完全なる文学的言語となりしは紀元前一五〇〇年の頃にしてパレスチナに於ける希伯来民族が其王国を建てて宗教及文学に貢献したるは紀元前一〇九五年の事なり。サラセン帝国の勃興せしは以上諸国よりも遙かに後年にして即ち第七世紀の頃なりと雖も、彼等の創造したる回教は今日三億の信徒を有し中亞全土に亘りて散布せり。独逸の地理学者カール・リッテルは文明を三階段に分ちて河川時代、内海時代、大洋時代と為ししが、此等の地方は東半球大陸の中央に位して、自らナイル、チグリス、エウフラチス、印度河、恒河、黄河等の長流を有せり。上古の文明は皆此諸流に沿いて栄えたるなり。想を五千年の往昔に走せて燦爛たる文化の跡を追わば中亞問題は実に旧の旧たる感無しとせず。

然れども邦家の興亡は猶春暁の二夢の如く、此等の古代文明は今や殆ど痕跡すらも留めずして唯大河の滔々として流るるあるのみ。今日世界に於て羸弱の野蛮国と称せらるるは波斯なり、阿富汗斯坦なり、亜刺比亜なり。印度は滅びて英国の統治に歸し、埃及亦英国の権内に推移して国民的気力の伸びざることや久し。バビロニアの文明も今は酷熱無人の境と化し、アッシリアの文化も寒煙孤村の散点に委す、所謂桑田の変じて海と成るもの即ち是なり。而して此等の文明は多く砂漠と荒野とに變じたり、砂漠と荒野とは中亞の名物なるが如し。十万人の工夫が二十年間營々として勤勞し、三十三尺以上の巨岩無慮二百三十万個以上を堆積して竣工せりと伝うるフーフ一世の大金字塔は、今や其残骸を埃及の砂漠中に横えつつあり。百個の唐金門と、六十哩周囲の外郭と、八十七尺の原壁と、三百五十尺の高堞と、架空の庭園と、黄金の堂宇とを以て誇りたるバビロンの古都は、今や尽く是れ一塊の黄土と化し去りて、

処々に堆積せる砂礫中より拾い得べき赭色の欠瓦にのみ一片の痕跡を留めつつあり。波斯(ペルセ)の西南部荒寥たる高原に巨大の石段を築きて縦千六百二十三尺幅九百二十尺の露台を成すものは、ペルセポリスの敗殿なり。『人若し(④)ペルセポリスの雄大なる前障に馬を立て、既にして其廣大なる敗殿中に彷徨せば初めて敗殿其物は遊客の心裡に雄偉の感を惹起するならん。』とは前印度(インド)総督カーゾン卿の語なるが、而かも金字塔や、バビロンの古都や、ペルセポリスの敗殿や孰れか遊子の心魂をして今昔に俯仰せしめざるものぞ。

### 三、文明と人類

思うに人類が一定の地域に繁殖して生活を営み、地上の食物を採取すること数百万年に亘れば地力は自ら消耗せらる。(⑤)聽(⑥)て文明の爛熟と共に人類が享樂頹廢に流れ、地力の涵養を怠るに至らば踵(⑦)で来るものは土地の荒廢なり。荒廢甚しきに至りて茲(⑧)に砂漠を現出す。五千年前国を建てて文化第一を誇りしもの今日広茫たる砂漠に過ぎざる所以なり。鬱として千古に聳ゆる大森林も、人類の侵入して之を伐採し、其跡に住居するに至りては多年に亘りて地力を蚕食し、終に植物を繁茂せしめ得ざるに至る。森林なき河流に水源の涵養ある可らず、一朝の雨水に土壤を流して磊々たる砂礫(⑨)を出現するは固より其所なり。伝説に拠るにチグリス河岸より地中海なるダマスカスに至る數百哩(マイル)の間、日光をも仰ぎ得ざる大森林の連続したりと謂うも、數千年間に亘る濫伐の結果一点の青をも望む能わずなりぬ。吾人は又近く之を朝鮮に於て見るに禿山累々として殆ど眼に一青の遮るものなし、總督府の銳意殖林に努力するも水源の回復は數百年の後に待たざる可らず、然かも是れ朝鮮古代文明の殘骸たるを語るものなり。国破れて山河ありというも山河亦破るるを見る。支那黄河の流域は四千年前文明栄えたる所なりしが今や其沿岸は殆ど

第六編

日米問題

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 太平洋に於ける米國

### 一、太平洋に乗出せる米國

米國クーリッジ教授は其著『世界的米合衆國』に於て、『米國が若しルイジアナを買収すること微りせば、西方太平洋に達することが出来なかつたであらう』ということを言明している。米國が仏國よりルイジアナを購つたのは一八〇三年であるが、之を冒頭として一八一九年には西國よりフロリダを、一八四五年には墨西哥よりテキサスを収め、更に対墨戦争の結果はニューメキシコ、アリゾナ、カリフォルニア等の尠大なる版圖を太平洋岸に有するに至つた。斯くして既に太平洋東方に於ける瀕岸の大国たるに至りし以上は、勢い北方に蜿蜒するアラスカ大陸を自家の勢圏に投ぜねばならぬ。於 是、露國と交渉して遂に一八六七年其買収の効を得たのである。

一八九八年には太平洋の樂園と謳わるる布哇を合併して宿昔の志を果たし、又同年には端なく西國と戦うてカリブ海に玖馬及ポートルコを収め、太平洋には一躍比律賓群島並にガム島を得た。爰に極東支那大陸に対して不拔の策源地を設定せしや言うまでもない。

一九〇〇年には独逸(ドイツ)と共にサモアを分割し、其占領に帰せるチュチュイラは南極星座下に在って遙に米国の海権を南太平洋に進展せしむるの根柢を成すものである。

一九〇三年には巴拿馬(パナマ)共和国を援けて母国の哥倫比亞(コロンビア)より独立せしめ、巴峽運河地帯を獲得し、一九一七年にはカリブ海に於て運河航路の要衝に当るセント・トーマス外二島を買収し、依て以てカリブ海一帯の戰略的価値に一段の形勝を加えしめた。

## 二、彼理来航と海権問題(ペリ)

一八五三年米国の水師提督彼理(ペリ)が軍艦四隻を率いて相州浦賀に來航し、開港を迫ったことは臆(おそ)て我維新革命史上に一大開展の幕を切て落とせるものであつて、国民の脳裡永久に忘失す可らざる所である。

米国をして我に開港を迫らしめた動機果して如何、是より先、米国が我国に開港の機を得んと欲して果さざりしは一再では無かつた。即ち一八三七年にはモリソン号をして漂流民を送還せんとして江戸湾外に打払われ、転じて鹿児島湾にて同様の運命に遭いて空しく帰国せしことや、一八四六年ビッドル提督が軍艦二隻を率いて江戸湾外に來りしも遂に其志を果さざりしことや、其他捕鯨船員の難波漂着せし者を我国にて虐待せしという風説を耳にして決心を堅めた事等に相違ないが、更に重大なる理由は此時早く既に彼国の注目せし北太平洋の海権問題に存したことを疑う訳に行かない。

当時米国は墨西哥(メキシコ)と戦てカリホルニアを獲得し、同州より大金鉱を發見せしことは太平洋岸地方の大股賑を促がし、其事實は延て洋を隔てて対岸なる支那大陸との間に貿易の隆盛を來たして、外国貿易の過半は米国々旗の下に行われつつあったから、太平洋の中間に在る我国港湾が如何に彼に取て必要なり

しかは言うまでもない。加<sup>(シカのみならず)</sup>之当時英国は既に東印度<sup>(インド)</sup>に属領を有し、且つ道光鴉片<sup>(アヘン)</sup>の乱に乗じて清国をして香港を割譲せしめ、東南洋の一角に隠然たる大勢力を扶植せる一方には、露国の亜細亞<sup>(アジア)</sup>經營<sup>(経営)</sup>亦一段光彩を添え来り、ムラヴィエフ將軍新に東部西比利<sup>(シベリア)</sup>の提督たるに及んでニコライスク府を創設し、我北辺なる千島樺太等に探險隊を派するなど頗る侮る可らざるものあるを看取せし米国は、之が對抗の必要よりするも我に開港を迫らざるを得ざりし次第である。

### 三、布哇の合併

布哇<sup>(ハワイ)</sup>が太平洋上に於ける戦略的重衝に在ることは、マハン大佐以来世界兵家の間に夙に道破せられた所であるが、巴拿馬<sup>(パナマ)</sup>運河開通せる今日に於ては、大西洋の彼岸なるカリブ海の戦略地点と応呼して、実に画竜点睛の妙味を有するものと言わざるを得ぬ。彼は米国の太平洋岸に於ける策源地たる桑<sup>(サンフランシスコ)</sup>港のメヤーアイランド、並にピュゼットサウンドのブレマートン要港を基点として、東洋方面に進で策動する場合には、主要なる前進根拠地たることは勿論、退て其西海岸を守るに当ては、東洋方面よりする攻撃艦隊を其側面より脅威するから、布哇<sup>(ハワイ)</sup>にして陥落せざる限り、容易に米国の西海岸に近く<sup>(おぼろ)</sup>ことが出来ない。されば布哇<sup>(ハワイ)</sup>は夙に米国の占有に帰すべき運命を有していたのであるが、時は一八九三年女王リリオカラニ兄カラカワ王の跡を継いで同島に君臨するに及び、補弼宜しきを得ずして時勢に適應するの政見を欠きしたため、其施政は却て白人<sup>(カエウ)</sup>の反感を挑発して遂に革命を招き、其極女王は廃せられて共和政府設立せられ、米人ドール氏推されて大統領となったのである。共和政府は頻りに米国に向つて合併運動を試みたが、当時の民主党大統領クリーブランド氏は流石に之に躊躇した。然るに一八九六年共和党のマッ

キンレー氏出で、大統領たるに及び、帝国主義的施政の食指は連りに布哇(ハワイ)に向て動き初め、茲(ここ)に米西戦争の二年後勃発するに至りて軍事行動上、中立国にては不便を感ずること尠(すく)ならず、遂に一八九八年之を合衆国の一州として合併するに至った。

爾来米国はホノルルを西に去ること遠からざる真珠港を修築して、艦隊を修容するに適する錨地の浚渫、又は船渠並に修理工場等尠(すく)からざる巨費を擲て、今や太平洋心に於ける一大前進根拠地となつたが、将来は夫(そ)のガム島と相応呼して比律賓群島を本国に結付けんとする重大なる連珠の御用に立つものである。

#### 四、米西戦争

玫瑪(キューバ)馬(ママ)は多年母国西班牙政府の苛政の下に在り、擾乱止む時なく隣傍に在る合衆国の迷惑は此上も無かつた。有繋の大統領クリーブランドも見るに見兼ねて玫瑪(キューバ)統治の改善を忠告した程であつたが終に顧られなかつた。然るに一八九六年マックキンレー大統領となるや、米国政府の態度強硬を加え来れる折柄、玫瑪(キューバ)ハバナ港に碇泊せる米艦メイン号が突然爆沈せるの不幸あり、米国人は直ちに之を西班牙方(スペイン)の隠謀なりとして国論一斉に沸騰し、乍(たちま)ち政府をして西班牙国に向つて宣戦を布告せしめ、提督サムソンをして、艦隊を率いて玫瑪(キューバ)征討に赴かしむる一方には、東洋艦隊司令官ジュエー提督に命じて突嗟マニラの襲撃を令したのである。其結果は玫瑪(キューバ)方面に於てはサンチャゴ港外に於てセラウエラ艦隊の殲滅に帰し、東洋方面に於ては殆ど刃に舐(な)らずして老朽西国艦隊の潰滅、次でマニラ湾の占領となつたのである。而して西国カマラ提督の率ゆる東洋増援艦隊は途中根拠地を有しなかつたため、補給の途絶えて其艦隊

第七編

阿<sup>ヘ</sup>  
弗<sup>ア</sup>  
利<sup>リ</sup>  
加<sup>カ</sup>

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com



阿弗利加縦断鉄道図

附・欧阿南米連絡図

## 阿弗利加縦貫鉄道

### 一、阿洲地図の塗直し

阿弗利加は戦前、英、仏、独、白、葡、伊、西諸国の分割する所となっていた。此内最も優位を占めたるは英国であつて、北は埃及のカイロより南は喜望峰のケープ・タウンに至るまで自領を以て阿弗利加を縦貫せんとするのが、セシル・ローズ、チェンバレーン以来の一大願望とせられている。仏国は一九〇四年埃及に於ける利権を英国に譲つた代り、モロッコに於ける優越権を獲得し、アルゼリアの自領と共に北は地中海沿岸よりサハラ沙漠を縦貫し、南は大西洋岸ギアナ湾に至る一帯を掩有し、海を隔てたる南米と交通上最捷徑を占めていた。白耳義は其本国の小に似合しからざる公果の大植民地を領有し、葡萄牙も古き植民国の名残を留めて、東と西との両岸にモザンビーク及びアンゴラの大領域を有しているのである。

独逸は一八七一年帝國統一の大業を終えてから、世界の面に植民地の獲得を焦せり出したが、大抵の肥土沃地が他国の領有に歸していたから、最初に着手した阿弗利加でも熱帯圏内の非道い所で我慢する

の已むを得なかつたのである。即ち東海岸に於ては独領東部阿弗利加、西海岸に於てはカメルン、トゴランド、独領西南阿弗利加是れである。斯く本国から遠く隔り、植民地同志が、離れ離れになっていては、国力を分割し統治の上に多大なる不便損失がある、そこで所謂『独逸阿弗利加大帝国』建設の夢想は、伯林バグダード計画と前後して汎独逸主義者の胸中に燃立つたのである。

独逸阿弗利加大帝国の計画は埃及の叛乱を助長して旧領主たる土耳其に奪還せしめ、トリポリ、アルゼリア、チュニス、セネガル等諸国の回教徒を懐柔して仏伊諸国より独立せしめ、勢を以て南下し、自領を拡張連絡して艦では英、白、葡、諸植民地を奪取し、以て阿弗利加全土を自己の手に収めんと欲するもので、之が実現の暁には独逸の領域は欧亜阿三州に跨り、富強は遙かに昔日の羅馬帝国を凌駕するものがあるのである。而して之が急所は蘇土であつて、英国にして若し独逸に蘇地土峽と波斯湾とを領有せらるるが如きことがあつては、印度の安全を期す可らず、印度の喪失は即ち大英帝国の崩壊を意味する所から、英国は開戦直前たる一九一四年六月十五日独逸とバグダード鉄道に關する協定を遂ぐると共に、阿弗利加に於て独領の赤道主義、即ち赤道に添うて東西兩独領の連絡を承認したのであつたが、此協定が批准せられざるに先つて平和は遂に破れたのであつた。若し此赤道主義なるものが実現されていたならば、仏領コンゴ、白領コンゴ、葡領南部アンゴラは独逸植民地と同色に塗変えられてあつた筈である。強国の相談ずくで、危く自領を浚われんとした小弱国こそ宜い面では無いか。

大戦勃発以來阿弗利加に於ける形勢は一変し、独領西南阿弗利加は主として英軍の手に、カメルン及びトゴランドは英仏聯合軍の手に、東部阿弗利加は英白葡聯合軍の手に収められ、独逸阿弗利加大帝国建設の大望は空しく幻影と化し去つた有様であるが、独逸本国に於ける輿論は容易に阿弗利加を放棄せ

ず、白耳義本土を返還する代償としてコンゴを得、アルサス・ローレンの代りに仏領阿弗利加を獲得すべしとは殆ど一致せる独逸国民の声である。最近戦後の経済戦に備うべく原料争奪戦が著しく高潮せられているが、植民学者ジンメルマンの如きは此機会に於て白仏両コンゴのみならず、ニゼリア、カメルンを合せて一大中阿植民地を獲得し、原料を之に依頼すべしと論じている。

形勢此の如くであるから、現に独領植民地の処分問題が盛に聯合國の間に論じられていても、講和会議の結果は如何に変化するべきか殆ど逆賭す可らざるものがある。恐らく阿弗利加の如きは講和の席上分割地図の塗直しが実現せられ、独領植民地の処分どころか、反対に聯合國植民地の処分問題となりはまいか。是れ亜細亜問題に次で阿弗利加問題の重視せられざる可らざる所以である。

さわれ独逸が阿弗利加を獲得しようとも、或は其植民地を永久に喪失しようとも、孰れにしても既定縦貫鉄道の計画には大した変更もあるまいと考へる。是れ吾人が英仏両国の縦貫計画に就て茲に少く研究せんと欲する次第である。

## 二、カイロよりカルツーム

英国の三C政策とは今更云うまでもなく、埃及のカイロより東して亜細亜の南半を横断して印度のカルカタに到るもの、及び南して阿弗利加を縦断し喜望峯のケープ・タウンに到るものを指すのである。此内前半のカイロ・カルカタ政策は別項に於て聊か研究の一端を発表して置いたから、茲に英国の阿弗利加縦貫鉄道を研究することは、所謂三C政策の残半に着手する訳である。厳密に云えば阿弗利加縦貫ケープ・カイロ線の基点はカイロに非ずしてアレキサンドリア又はポートサイドでなければならぬ。ア

第八編

亜細亞（アジア）雑篇

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 海外に暴露さるる邦人の弱点

曾て新渡戸博士は『武士道』を著わして世界に我國の士魂を紹介し、又菊池博士は倫敦大学に『教育勅語』を講義して我民族性を泰西人に知らしむる所ありたり。芳賀博士の『国民性十論』は（一）忠君愛国（二）祖先を尊び家名を重んず（三）現世的实际的（四）草木を愛し自然を喜ぶ（五）楽天洒落（六）淡泊清洒（七）織麗織巧（八）清純潔白（九）礼節作法（十）温和寛恕の十要目を挙げて我民族性の特長なりとし、三沢学士の『国民性と教育方針』は（一）日本人の順応性（二）原始的なる日本人（三）克己自制力の強大（四）恬淡洒落にして執着力なし（五）現在的实际的（六）人生に淡くして天然に厚き情感の興味（七）上品にして優美なる情感（八）美術的なる日本人（九）日本人の勤勉貯蓄心（十）日本人の偉大性（十一）日本人の個性に分ちて日本民族の特長を列挙したり。凡て個人たると国民たるとを問わず、己を知り他を知ること難し、他が如何に己を知りつつあるやを知ること更に難し、総て広告の世界に於て、沈黙の偉大は必しも他より認められず、他をして我を知らしめんが為には或程度までの吹聴を必要とす。然れども此程度は動もすれば極端に流れ、茲に各人各国有り勝ちの自慢に陥ること無しとす可らず。近時の我国を見るに御国自慢の風潮は著しく蔓延しつつあるもの如し、尤も日露戦後

より歐洲大戰の現代に亘る十余年に於て我國の國際的地位に異常なる進歩を遂げ、興国の股運喜ぶべきものありと雖も、其國家維持の中心を形成すべき国力に至りては未だ遽かに歐米列強に追及する能わざるものあり、苟くも遠大の志を藏するもの氣満ち意驕り夜郎自大の陋態ある可けんや、須らく叱咤鞭勵我國民性の弱点を匡正し、以て名実相備の大國家を建設するに努むべきなり、若し夫れ我国々体の尊嚴に至りては千古万古に秀絶す、今更之を風塵の裡に暴らして御国自慢の材料となすが如きは寧ろ自ら謹慎すべき所に属す。

邦人の弱点は遺憾なく海外に暴露されつつあり、之れ蓋し在外邦人が在内邦人に比して弱点を多く享有すというに非ずして、何人と雖も海外に在りては自制力と自省心とを失いて不知不識の間国恥を暴露するの弊に陥るものなり、従来市井に行わるる「旅の恥は掻き捨て」と謂い「人を見れば盜賊と思え」と謂うが如き、今日邦人が海外に於て如何に其弊とする所を發揮しつつあるや知る可らず。今や吾人は更に勵声一番海外邦人の欠陥に向つて叱咤し、以て自制反省の境地に入らしめざる可らざる機会に達せり。

目下の在外邦人は総て三十六万人にして支那に在る者十二万を最多とし、北米合衆国及加奈陀に在る者十一万、布哇に在る者八万、南米及墨西哥に在る者二万四千、南洋に在る者一万七千、西伯利亞に在る者四千之に次ぐ、此他我國辱の最たるべき所謂娘子軍中にして官庁調査外に属する者数千を算すべく、又新領土に移住せる内地人は朝鮮に三十万、台湾に十三万あり。即ち本土を辞して海外及植民地に移住し、異邦人又は新附人と日々相接せる者は合計八十万人以上に出づべく、彼等の一挙手一投足は聽て我國の総てを評価する所以ならずんばならず、思うに海外膨脹の機運は固より必然の勢にして敢て阻止すべきに非ずと雖も、対外的に陶冶試煉せられざる我国民性の弊所短所を以てしては、異邦人をして益々

## 解説

C・W・A・スピルマン  
長谷川 雄一

『奪われたる亜細亜』は一九二二（大正一〇）年三月に廣文堂書店から出版され、その直後から同時代の人々によって高く評価された満川亀太郎の代表的論著である。満川の同志で著名なアジア主義者である大川周明によれば、同書の出版により日本人のアジア問題に対する関心が飛躍的に高まったという。大川はこの「好著」が出版されるまでは、「アジア問題に関する国民の知識は、予想以外に貧弱であり、アジア問題に対して風する馬牛で」あり、中国を除く「アジア諸国の研究は、從來殆ど等閑せられて居た」と述べている<sup>1)</sup>。日本語で書かれた中国以外のアジア諸国に関する書籍は当時少なく、アジア全体を視野に入れた著作はほとんど皆無であったことから、同書はアジアの全体的な状況のみならず歴史や政治的背景を視野に入れながらアジア主義を論じた著作として大いに期待されたのである。

『奪われたる亜細亜』は無論、アジア主義に関するわが国初の著作ではない。一九世紀末以来「アジア主義」という言葉そのものが造られる以前から、「興亜」や「アジアモンロー主義」という表現を用いて、近衛篤磨公爵、徳富蘇峰、岡倉天心や黒龍会発行の機関誌が後の「アジア主義」に相当する思想を提唱していた。しかし近衛公爵と蘇峰の「アジア」は東アジアに限定されており、岡倉の場合はそこにインドを含めていたが、いずれもアジア大陸全体を視野に入れてはいなかった。アジア主義団体として有名な黒龍会も同様であった。こうした狭く限定的なアジア主義が主流であった当時からすると、アジア全体を視野に入れた満川

## 解説

のアジア主義は斬新であり、大川をはじめとする多くの人々がその先駆性を賞賛したのも無理はない。『奪われたる亜細亜』は従来 of 日本におけるアジア主義の枠組みを超え、新しいアジア主義の原点となる可能性を秘めた書であった。

こうした『奪われたる亜細亜』の特徴を高く評価して松本健一氏は、同書を大川が著した『復興亜細亜の諸問題』と並ぶ日本のアジア主義の古典と位置づけている<sup>2)</sup>。だが満川の著書が大川のそれより一年以上早く出版されていることを見落としてはならない。二人が取り上げているテーマを比較すると次のような類似点が見られ、満川の著作に感銘を受けた大川がペンを執り『復興亜細亜の諸問題』をまとめたと思われる。まず両者とも著作の第四章でインドの状況を分析しており、第三章では東南アジアを取り上げている。そして満川も大川もともに第三章で扱っている東南アジア問題をシャム(タイ国)に限定している。また二人はともに中近東問題に注目しユダヤ民族のパレスチナでの国家建設の運動を詳しく論じ好意的に評価している<sup>3)</sup>。これらの類似点は単なる偶然とは考えにくく、大川が満川の著作を意識し、それに影響されて『復興亜細亜の諸問題』を書き上げたと思われる。このことは決して大川の独創性を否定するものではなく、たとえ二人が扱っているテーマが類似していてもテーマへの接近の仕方には多くの相違が見られる。

満川が『奪われたる亜細亜』を執筆した動機を理解するには、まず満川の人となりとアジア主義との関わりを検討しなければならない。

満川亀太郎は明治二二(一八八八)年大阪に生まれ、幼年時代を京都で過ごした。満川が七歳の時、三国干渉が起き、この屈辱的な事件は彼の記憶から生涯消え去ることはなく、彼のアジアへの関心の萌芽となった。その後、満川は明治四〇(一九〇七)年に早稲田大学政治科に入学したが経済的な理由で中退を余儀なくされ、編集者・記者として自活し始めた。政友会系の『民声新聞』や『海国日報』の主筆を経て、大正三(一九一四)年九月には月刊『大日本』の主筆となり、大正九(一九二〇)年一月までこの地位に留まった。

編集者・記者として活躍する中で満川はアジア主義者との交流を深めた。記者に成りたての頃、頭山滿、河